

物性研に着任して

凝縮系物性研究部門 高木 里奈

2023 年 4 月に物性研に着任し、研究室の立ち上げという大きな転機を迎えました。この 1 年半を振り返ると、時間がさらさらと通り過ぎていったような感覚で、遠い過去のようにぼんやりとした記憶だけが残っています。

記憶を辿るなかで、小さい頃のことを思い出しました。一人っ子で両親共働きだったこともあってか、私は割とマイペースな子どもだったようです。保育園の昼寝の時間になっても昼食が食べ終わらず、ひとりポツンと食事を続けながらぼんやりしていることがよくありました。また、文字に興味を持ってからは、保育園から帰る前に下駄箱に書いてある 60 人くらいの名前をすべて読まないと、その場を動かなかったそうです。小児喘息で病弱だった小学生時代は、一人で寝転がりながらベランダの先の空を眺める時間が長かったように思います。環境破壊や地球温暖化について知るようになると、大気汚染で喘息が悪化するのも、空が汚れるのも嫌だなと、環境問題の解決に携わる仕事がしたいと考えるようになりました。その後、東大の理一に進学し、1、2 年生のときに環境問題に関係しそうな分野の授業を取り、迷った末に工学部物理工学科への進学を決めました。元々、ものづくり(工学)に興味があったこと、普遍的な物理法則をもとに全く新しい材料や技術を実現することに魅力を感じたからです。しかし、いざ初日のガイダンスに行ってみると、同級生の中に女性は私一人だけ、そして教授も全員男性という状況でした。さすがに先行きに不安を覚え、もし耐えられなくなったら大学院で他の専攻に移ろうと決めることで心を落ち着かせて、卒業までの 2 年間は勉強に集中することにしました。物性研で研究室を立ち上げるまで物性物理の研究を続けるとは、当時は全く想像していませんでした。

研究室配属に際し、省エネにつながる新しい電子材料が実現できるのではと、強相関電子系が示す量子多体現象に興味を持ちました。卒論研究では酸化物、大学院時代は分子性導体、ポスドク以降は金属間化合物と、対象物質は移り変わっていますが、研究を進めるにつれ、共通の物理があることがわかってきました。物質の多様性の中にある普遍性を見出す面白さは、今も研究の礎となっています。

これまで研究生活の大半は本郷で過ごしてきましたが、

物性研に着任するにあたり実験装置も自宅も柏に移ってきました。自分より背の高い道端の雑草、目覚まし時計よりも早起きの鳥の鳴き声、真っ暗な夜道で際立つ月明かりなど、周囲の自然に触れる機会は格段に増えました。また、物性研ではサッカー、テニス、ラジオ体操と、体を動かすことに積極的な雰囲気が素敵だと感じており、触発されて 6 階で(なるべく)毎朝、筋トレするようになりました。小 1 から続けているクラシックバレエでは、体幹や筋力の向上を感じていますが、研究活動への効果については引き続きデータ収集・解析していくつもりです。

昨年 4 月の研究室立ち上げに続き、人生の大きな出来事として昨年 9 月に出産を経験しました。着任直前の 2 月、3 月は悪阻のためか、食べ物の匂いで吐き気と頭痛がしていたため、学生居室や食堂、カフェ、コンビニなど、どこにいても辛く、頭も体も働かない、ほぼ何もできない状態でした。4 月に入って体調は徐々に回復したものの、妊娠中で力仕事ができず、実験装置の移設や組み立てなど、周囲の方々には本当に多くのサポートをいただきました。また、物性研で産休取得は初めてとのことで、総務係をはじめ関係各所にも大変お世話になりました。この場を借りて、心から感謝いたします。

育児が始まり、研究時間の確保がまだ解の見えていない課題の一つで、これまでとは異なる研究スタイルを模索しています。学生・ポスドク時代は結婚後も同業者である夫の理解があったため、研究中心の生活をしてきました。終電まで実験したり、土日も好きな時に解析や執筆作業を進めたり、また結婚式の 3 日後から 2 週間ほど出張実験に行ったりと、いわゆる「男性的な」働き方をしてきたと思います。一方、今では出張実験、研究会、打合せなどを予定する際、子どもを帯同するか、保育園の送り迎えをどうするか、当日に子供が発熱したらどうするか、など検討事項が増え、時間の制約に頭を抱えることも少なくありません。招待講演を辞退したり、授賞式を欠席したり、出張実験を共同研究者に任せたりすることが重なると、申し訳ない、残念な気持ちが募ってきます。ただ、子どもと接していると、しばらくは「まあいいか」と思えるようになります。また、育児は自分を見つめ直す機会にもなっています。

仰向けで寝ているだけだったのが、うつ伏せ、お座り、ハイハイ、つかまり立ち、と一つ一つできることが増えていく過程で、(少なくとも我が家の)子どもはじっと観察し、試し、失敗してまた挑戦する、を繰り返しています。新しい能力や視点を獲得する時のひたむきさや、乗り越えた先でまた挑戦を始める姿勢に尊さを感じるとともに、研究も焦らず一つ一つ進めていこうと思えるようになってきました。こうした日々の中で、いま自分は初めて「女性的な」働き方をしているのではと感じています。これまで「女性研究者」として周囲から見られる価値や意味が自分にあるのかと悩んでいましたが、最近では、いわゆる「男性的な」働き方の研究者とは異なる方向性や視点で研究ができるかもしれないと考えています。

この1年半は、私にとって大きな変化を伴う時間でした。これからも変化と挑戦を続けながら、自分のペースで進んでいこうと思います。